

# 近代日本における教員批判言説をめぐる一考察 ——ある新聞投書欄「炎上」事例を題材に——

河野 誠 哉

## 1. プロローグ—「秋風」登場

これから取り上げるのは、今からおよそ100年前の『読売新聞』投書欄のなかで繰り広げられた、ある論争である。ただし、それを「論争」と呼ぶのは少々お上品すぎるかもしれない。実際のやり取りは必ずしも理性的な討議とは言い難いものも多く、むしろ中傷合戦に近いのだが、ほかにふさわしい用語が見つからないので、とりあえずここでは「論争」の文字を当てておくことにする。

論争のテーマは、小学校教員の評価をめぐるやり取りである。事の発端となったのは、「秋風」というペンネームの筆者による次のような小さな論評記事だった<sup>(1)</sup>。

「凡そ此の世に田舎の小学教員ほど程自尊心強き者は無からう。幼稚なる児童等に神仏の如く畏敬され、又自らも斯く盲信してゐ何がえらいのか。汝等は皆元貧家の子弟で学資無く、漸く府県費を以て師範を卒業さして貰つた者共だ。校長とか訓導とか威張つて居て衷心果たして恥づる所なきか。」(秋風/1911.10.14)

この投稿の主である秋風なる人物は、それ以前から同投書欄にたびたび登壇していた常連のひとりであり、この時点ではすでに同欄の愛読者たちからは一目置かれるほどの地歩を築いていたようである。それはちょうど、同欄ではその直前までひとしきり盛り上がった宗教論をテーマにしたやり取りが一段落した頃で、それに代わる新たな論争テーマを設定しようというつもりだったのか、次なる話題として秋風が提示してみせたのが、上のような小学校教員の生態に対する批判だった。

ところが、この小さな投書記事はやがて他の投稿者たちによる猛烈な反発を引き起こすことになる。半月ほどもすると、同欄には秋風のくだんの発言を非難する投書が相次いで掲載され始めるのである。それは現代のネット用語ふうに表現するなら、まさしく「炎上」と呼ぶにふさわしい事態であった。

非難の声は、たとえば以下のようなものである。

「秋風氏は教育の真髓を知れるや。育英事業は天下の三楽の一たるを知れるや。金の為うんぬんに云々す君の言、狂言たり。かかるは君の人格の地平線下たるを証明せるな

り。」(小倉蘆雁／1911.11.2)

「秋風君の大人げない論には実にあきれる。小学校教師が皆『貧家の子弟』とか『府県費云々』とか、こんなことは中学の一二年生や商店の小僧などは得意がつて言ふけれども、<sup>しか</sup>而も本欄に堂々一旗<sup>し</sup>幟<sup>し</sup>を樹立する君が口から聞かうとは実に意外だ、<sup>これ</sup>之で君がお里も読めた。僕は今<sup>まで</sup>迄<sup>か</sup>少しく君を<sup>か</sup>買<sup>い</sup>冠<sup>つ</sup>て居た。」(茨城一骨／1911.11.5)

「秋風君に少し教へて進ぜる。小学校教員程自尊心が強い者はないとか、神仏の如く畏敬されてどうか、君の観察は皆誤<sup>ま</sup>つて居る。況して府県費によりて卒業云々に至つては青さ加減が思ひやられる。全体君は三大恩の一を忘れて居る不具者だ。」(岡山幽生／1911.11.10)

投書欄でのやり取りが仮にこの段階で終息していたのなら、ここでわざわざ取り上げるまでもない、ありふれたハプニングのひとつに過ぎなかったのかもしれない。ところが、ここで非難を浴びた秋風のほうもまた、ただ大人しく引き下がってはいなかった。すぐさま次のような反論を寄せて、燃え上がった火元にさらなる油を注ぐのである。

「貧家の子弟が高等小学を卒業して、何か出世の緒<sup>いとぐち</sup>も無いかと探してる間に偶<sup>たま</sup>師範は公費なる理由の下に入学して、卒業したのが今の郡視学、小学校長、訓導などだ。<sup>しか</sup>而して二三円の俸給の多寡に依つて此校から彼校へと転々職を移すのが先日此欄へ顔を並べた蘆雁、老杉、晚香、都築、石塚の徒輩だ。余の人格を云々する暇に自己を先<sup>ま</sup>づ顧みよ。」(秋風／1911.11.23)

文中に列記されているのは、自分を非難してきた投稿者たちの名前である。彼らが自分の投書に対して敏感に反応してきたのは、彼らたちこそ教員だからにちがいないと決め込んで反撃の拳に出たわけである。このように、発端となった秋風自身がたびたび挑発的な「燃料投下」をくりかえしたことも、一連の炎上騒ぎを長引かせることになった要因のひとつであった。

するとやがて秋風に同調する者も現れるようになり、今度はその同調者の発言をめぐって非難の応酬が交わされるような事態も起こってくる。あるいは秋風の手を離れて、教員の問題性やその背景を論じる投書も次々に寄せられるようになり、この投書欄において「教員問題」は、毎日のように論判が繰り返される一大テーマとして浮上してくるのである。

## 2. 課題と方法

導入が長くなってしまったが、ここであらためて本稿のテーマについて確認しておくことにしたい。

本稿の課題は、教員の社会的地位の存立基盤について考えていくことである。そしてこの課題設定は、いたって現代的な問題関心から引き出されたものにほかならない。まずはそのことから触れておくことにしよう。

近年の政策レベルにおける教員養成改革論議のモチーフのひとつとして、「教員の威信低下」という現状認識があることはまちがいないだろう。すなわち、戦後もある時期までは、教員は地域社会の中でも数少ない大卒学歴を備えた人材として社会の尊敬を集める存在であった。ところが、大学進学率の上昇によって学歴インフレが進行した結果、大卒者の希少性は薄れ、世間からは教員の備える資質や能力が以前よりもより厳しいまなざしで捉えられるようになってきた。だからこそ、今や「修士レベル化」を視野に入れた教員養成改革が必要だというわけである。

ここには教員の威信の問題を、もっぱらその養成プロセスの問題として理解しようとする発想の回路が含まれていることに注意を促しておきたい。このような対処の筋道は、果たして本当に妥当なものと言えるのかどうか。そんな現代的課題を念頭に置いたときに、参照可能な知見のインデックスを増やしていくためにも、我々が経験してきた過去の状況を明らかにしていく作業はおそらく方法的な意義をもつはずである<sup>(2)</sup>。

とはいえ、ではなぜこの事例なのか。

それは教員批判の系譜のうちに位置づけられる格好の参照事例だから、というのがこの問いに対するさしあたっての回答ということになるが、戦前における小学校教員の社会的地位がきわめて不安定なものであったという事実そのものについては、先行研究の蓄積のなかではすでにほぼ定説化した見解だと言えるだろう。とりわけ明治末期から大正前期にかけての時期（1900年頃から1920年頃まで）は、教員の地位低下が大いに進行した時期とされ、そのことを示す様々な事実が、新聞記事や教育雑誌記事等の資料によって明らかにされてきたところである（石戸谷 1967, 海原 1973, 陣内 1988, 門脇 2004, など）。

それら先行研究が明らかにしてきた知見との間に多くの前提を共有しているという意味では、本稿での試みも結局のところは、そうした定説的理解のバリエーションの域を超えるものではないのかもしれない。しかしそれでもなお、いささか風変わりなアプローチでもって本稿がこのテーマに取り組んでみようというのは、教員の威信をめぐる社会的な認識の構造に照準を当てたいからにほかならない。新聞投書欄上の論

争というひとつの事例にじっくりと寄り添うことを通して、「教員」という社会問題が具体的に立ち上がっていく場面を、つぶさに観察することができるのではないかと考えるのである。

そもそも、この投書欄において、いったいなぜこれほどまでに小学校教員の評価をめぐる論争がヒートアップしていったのだろうか。

数え方にもよるのだが、1911年秋からおよそ1年ほどのあいだに、同投書欄でこのテーマに触れた投書記事が掲載されたのは、日数にして延べ130日ほど、件数でいうと約180件に及んでいる。この間には、「近頃の様な読むに堪へぬ嫌な文句はよしにして、皆筆を洗つて本欄をもつと趣味あるものにせうではないか」（萍子／1911. 11. 16）といった、取りなしや論争停止を求める提案がじつに頻繁に提出されるのだが、その手の消火活動は文字どおり「焼け石に水」で、いったん燃え上がった炎はなかなか収まらない。

そこにはもちろん、前述したとおり、この論争の発端を作った秋風なる人物の果たした役回りも大きく作用していたことはまちがいないのだが、しかし、それだけが理由とはさすがに考えにくい。教員というテーマが、読者たちをして敏感に反応させる話題であったこともまた確かであるだろう。となるとそのこと自体、検討を要すべきひとつの社会的事件であるにちがいない。秋風が演じたエキセントリックな役回りまでも含めて、それは歴史社会学的な観点からの解説を試みるに値する題材であるように思われるのである。

この論争の舞台となった投書欄についても、あらためてその概要を説明しておくことにしたい。

ここに取り上げるのは『読売新聞』紙上の一スペースである「ハガキ集」欄である<sup>③</sup>。投書欄といっても、今日の新聞各紙における一般的な投書欄のスタイルとはずいぶんイメージが異なることに注意が必要である。「ハガキ集」というタイトルが示しているとおおり、掲載される内容は葉書の通信面を前提としているものと思われ、今日一般的な新聞投書記事と比べると、投書一編あたりの文字数はかなり少なめである。長くても300字くらい、短いものでは30字程度のもので散見されるが、平均的には150字程度というところだろうか。投書ごとに個別の見出しタイトルは付けられてはおらず、また署名はあるものの、そのほとんどがペンネームで、投稿者の職業や年齢すら明らかでない。この匿名性こそは、本投書欄上の論争を彩る特徴的なやり取りを演出していくことになるのだが、そのことは後で触れる。

内容的にも多彩で、生真面目に自論を世に問うタイプのものもあるにはあるのだが、単なる個人的な思索や不満の表明といった内容の文章も多い。極端なケースでは、「これから自分も投稿してみようと思う」などという意気込みを示しただけの大変シンプルな投書も見うけられる。他方では常連の投書家もいて、雰囲気的には明治

期の年少者たちが美文を競った作文投稿雑誌の系譜を思わせもする（前田 1993）。

また「毎日この投書欄を読むことを楽しみにしている」という趣旨の投書が散見されることからすると、この投書欄自体が新聞本体にとっても相応の「集客力」を有していたことが想像される。

この欄が備えている上記のような特徴は、そこで展開されるやり取りの性格も含めて、今日の電子掲示板やツイッターといったネット上のコミュニケーション・ツールと全くよく似ていることに驚かざるを得ない。その意味では、メディア論的な観点からしても面白い素材であるにちがいない。歴史資料としての新聞投書記事を、単なる事実的な証拠集めのための材料として扱っていくのではなく、それ自体が解析の対象たりうる「出来事の記録（ログ）」として読み解いていくという、そんな試みを以下に展開していくことにしたい。

### 3. 偶像破壊者たち

では実際にこの論争の中で、教員たちの何が批判されていたのか。秋風の投書をきっかけに噴き出した教員批判の、具体的な事例をいくつか紹介しておくことにしよう。

「秋風君の説の如く、今の小学教員程傲慢不遜な者はあるまい。彼等が校長とか訓導とかになつて居るから生徒の父兄が彼等に敬意を表するも、鼻の先で挨拶をしてをるのだ。其他は推して知るべしである。何で国民を教育する資格があらうか。」

（埼玉黙嶺／1911.11.12）

「極端なる秋風君の意見には勿論全部賛成はし兼ねるが、多くの小学校教員中には只私利のみを計つて眼中国家無く国民無く、全く米食ふ虫然たるものがある。彼等は常識に於て一馬丁に譲り徳義に於て一車夫に劣る。」（周風生／1911.11.30）

「秋風子の意見はあまり極端に走つてるやうではあるけれど、小学校教員中には実に驚くべく常識の欠けたる素行修まらざる輩あり。現に我が村の〇〇氏、訓導なんて偉そうにしてるけれど、イヤハヤ其素行は呆れざるを得ないのだ—そんな者が教壇に立つた所で訓練が行き届くものか、児童が真面目に聞くものか、こんな者に教へられた児童の将来が実におそろしい。」（西備蘆州／1911.12.19）

挙げていくときりが無いのだが、そのほかにももう少し、批判のポイントだけ切り取って並べてみると、以下ようになる。

「<sup>はたまた</sup>体質の弱きか将又活気なき平凡な事無かれ主義の者が多い」(佐賀鉄蟬／1911.12.26)

「己れの浅学を棚へ上げて知らんでも知った振り」(数学者／1912.1.23)

「小学校の教員位品性の下等な者はたんとはあるまい」(風外／1912.1.24)

「今日の小学校教員諸君には確かに活気がない」(京都T I 生／1912.1.26)

「村落の教員になると意気地無しとなるのは実際だ」(芙蓉／1912.2.2)

「修養の念なきため理想は小、限界は狭く、加ふるに意志薄弱、ために自ら進んで事に当らんとする勇気がないのだ」(徳田青水／1912.2.24)

「要するに現代の小学校教員は無能無知で神経衰弱だ」(凸凹生／1912.6.26)

それなりに真摯な立場からの分析であったり、かなり悪意のこもった決めつけ的なレッテル貼りであったりと、それぞれの発言者のスタンスには結構幅があるのだが、いずれにしても教員にとっては手厳しい評価が並んでいることがわかるだろう。

ここに見られるとおり、挙げられている批判の焦点はさまざまなのだが、あえて整理してみると、ここには大きく2つの教員イメージが錯綜しつつ論じられているように見える。

そのひとつめは、教員のもつ権威者としてのふるまいに対する反発や嫌悪である。すなわち、「自尊心」が強く「偉そう」にっていて「傲岸不遜」というイメージがそれであるが、全体を通した印象としては、秋風に対して積極的な同調の立場を示してくる投書の中に、そうした傾向が顕著であるように感じられる。

いうまでもなく、その代表格と言えるのが秋風その人である。たとえば秋風自身による次のような発言は、その典型例といえるだろう。

「家庭に於ては父母が我身以上に大切に撫育する児童を、小学校に於ては教員は<sup>あとか</sup>恰も牧者が羊、豚を追ふが如き態度を以て接して居る。是れ第一に吾輩が学校教員なる者を<sup>や</sup>忌み嫌うて止まない<sup>ゆえん</sup>所以だ。」(秋風／1912.1.13)

とはいえ、教員が児童に対して権威的な態度で接することは、いうならば職業上必

要とされる役割規範でもあるはずなのだが、それにもかかわらず、そうした教員たちの態度が非難に値するのだとするその理由として秋風が挙げているのは、彼らの多くが貧家の出身であることや、その権威に見合うだけの学識が伴っていないことであった。要は「貧しい出でありながら、またたいした学識もないくせに、偉そうにふるまっていることが気に入らない」ということのようなのである。

貧家の出身という論点に関しては、すでに引用した文中にもあったとおり、彼らの学歴が師範学校卒であることがその直接的根拠とされていた。この点に対しては、「之を以て直ちに師範生は貧家の子弟なりと断定することが出来るかどうか」（老杉生／1911.11.3）とか、「小学校教員が富家の子弟で、私費の学校を卒業したものであつたら、貴いといふのか」（徳島工藤晩香／1911.11.5）などという反論が殺到している。

また学識の不足という論点に関して秋風は、「一実例を挙げんに高等三年算術書第三九頁<sup>だえん</sup>楕円面積計算法の原理を熟知する者、果して全国教員中幾人かある」（秋風／1911.12.24）と、教科書の該当ページ数まで示した大変細かい要求を突き付けて、論敵たちを逆上させている。これに対しても反論側からは、「楕円の問題を知らずとて教育は不能でない」（富山県M生／1912.1.28）とか、「教育者を攻撃せんとせば楕円面積の如き幼稚の材料による<sup>なか</sup>勿れ」（三河一訓導／1912.11.13）などという吊るし上げを食らうのだが、さすがの秋風もこの例示は些末すぎたと思に至<sup>はし</sup>ったか、のちの投稿のなかで「小学教員無学の一例として挙げたに過ぎなかつたのが端なく本欄の問題となつたのは意外だ」（秋風／1912.3.6）と、釈明めいたコメントを寄せている。

こうしてみると、秋風自身の教員批判は、論法的にはかなり無理押しの感が強いように思われる。言いがかりに近いという印象すら受けるのだが、それでもこのタイプの教員批判が、他の投稿者たちのあいだから一定の支持を受けていることは見逃すわけにはいかないだろう。このような秋風の主張に同調する立場からの投稿が、それなりの範囲で認められるのである。特に学識面に関しては、「楕円計算法」の別バージョンともいえる「円周率算出の原理を知らない教員」とか、「中学教員の無教養ぶりこそはもっとひどい」などという投書が現れている。

それにしても、この執拗さはいったい何なんだろうか。もちろんそこには、秋風個人の特異なパーソナリティや、匿名欄ゆえの気安さが作用していることは間違いないだろう。しかし、理由はおそらくそれだけではない。ここには、教員に対する「反感」というべき感情の一定の広がりを想像させるものがありはしないだろうか。

となると、こうした感情の社会的基盤はどのあたりにあったといえるのか。仮説的な見通しを示すなら、ひとつの背景として、そこには近代教育というものはらむ社会的作用の構造的帰結を見てとることができるのではないかと思われる。

すなわち、近代教育はその基本的な特性のひとつとして、教育される側のアスピ

レーションを煽り、加熱するメカニズムを内包していたといえる。そしてそこで教え込まれる知識＝学校知は、単なる生活知の延長ではないし、素朴に純粋な意味での教養知というわけでもない。学制序文の文言を借りるならば、それは「身ヲ立ルノ財本共云ヘキ」ものであった。

そして教員たちは、制度的に要求される役割として学校内では権威的な態度でふるまうわけだが、その際の教員たちの権威の源泉となったものこそは、まさしくその学校知＝近代知にほかならなかった。

しかしやがて、彼らの教え子たちの一部は、学校階梯を駆け登り、かつて自分たちが教えを受けた教員たちと同等ないしはより高いレベルの学校知を身に付けていくことになる。すると成長した彼らにとって、かつて自分たちに対して権威的なふるまいをみせた教員たちの姿は、以前よりもずっとみすぼらしく、底の浅いものに見えてくるだろう。

秋風やその同調者たちが、楕円計算法や円周率算出の原理といった学校知を振りかざして教員批判を展開するあたりには、そんな趣が感じ取れないだろうか。彼らの示した執拗さには、どうにもそんな自家中毒めいた気配が漂ってくるのである。

もちろん、いろんなレベルにおいて、師よりも弟子のほうがやがて優位に立つという事態は、古くからありふれているだろう。だが、それがすぐさま師の権威失墜の可能性を準備するという事態は、またそうしたメカニズムが一定の大衆的規模で起こりうるという事態は、近代的な公教育制度に固有の現象であるにちがいない。教員が育てた子が、成長した後になって教員社会に報復を図る姿がこれなのである。

秋風らを批判する立場からの投書の中には、「教員不信任論は小学校時代によからぬ<sup>たびたび</sup>を度々して<sup>ほんどめ</sup>晩留の刑をおほせつけられた為に、江戸の<sup>あだ</sup>讐を長崎でうつものに違なからう」(AR生/1912.3.29)という指摘がみえるが、実際にそれがどれほどに意識的なものであったかはともかくとして、時を隔ててからの予期せぬ報復という形式においては、構図的にはあんがい正しいところを言い当てているのかもしれない。これは推測でしかないのだが、ここで秋風の課題提起に共鳴した投稿者たちの多くは、近代教育によるアスピレーションの加熱を深く内面化した青年たちだったのではないだろうか。

もっとも、秋風一派による教員批判の背景はおそらくそれだけではない。このことについては後でもういちど触れることになるだろう。

#### 4. 聖と俗のはざま

さて、一連の教員批判言説を構成する要素のもうひとつは、教員たちの小市民的なふるまいに対する軽蔑である。「活気」がないとか「意気地」がないという評価がそ



れに当たる。

このタイプの批判は、どちらかという秋風からは一步距離を置いたところにスタンスをとる投書の中に多いという印象を受ける。つまりは「秋風的な極論には必ずしも賛成しないが、現今の教員には確かに問題がありそうだ」として指摘された中に、比較的多く登場するのがこのタイプの教員イメージであった。当時の教員に対するネガティブなイメージとしては、おそらく、こちらのほうがより一般的なのではないだろうか。

想像するに、当欄における教員論争が秋風やその狭い範囲の同調者だけを基軸とするものであったのなら、論争の規模はもう少し小さなものとどまっていたのではないかと思われる。言い換えるなら、この論争は、秋風が作った小さな火種が、当時の人々の抱いていた教員に対する問題意識を刺激し、それを巻き込んでいくことによってヒートアップしていったと考えられる。ふたたびネット用語ふうに表示するなら、秋風をきっかけにひとたび「炎上」したテーマが、やがて「延焼」を引き起こしていったわけである。

では、人々はいったいどんな事実から、このように生気のない教員イメージを引き出していたのか。この点に関して、少なくない数の投稿者たちが一様に言及していたのが、教員たちの置かれた不安定な社会経済的身分状況であった。

「要は唯、役場員、視学等のご機嫌を損ねぬ様にして俸給と賞与金との高の多からんを希望するのみ。其の日常彼等の交際を見るもトランプ骨牌にうつつをぬかさねば同輩の悪口か誰彼の昇給だとか賞与金だとかの話ばかり、当然己れの権限内にある職務に視学やら役場員やらに踏入らるるも一言も之に抗する事を知らず。」(僕／1912.1.18)

「村落の教員になると意気地無しとなるのは實際だ。これは主に老教員に多いが、その原因を探つて見るとかうだ。余りに椅子を恐れて郡視学や村長の髭の塵を拂つたり、村民の御機嫌をとるために思切つた意見も言へないのが本源である。村民からよい先生と言はれるのは無能を意味して居るのだが、若しも自分の意見通りやると排斥運動と出られるからこれ亦止むなく我を折つて意気地なしとなるのだ。」(芙蓉／1912.2.2)

「彼らの語る所は婦女子の品定めならずば即ち村長郡視学に如何にして気に入られ如何にして俸給を増さるべきかの一事なり、嗚呼彼等は遂に社会の蛆虫たるを免れざらん」(春秋／1912.2.8)

この点については補足説明が少し必要だろう。義務教育に従事する公立学校教員の給与が、現在のように府県費によって賄われ、その半額が国庫から補助されるという制度になったのは1940年のことである<sup>(4)</sup>。つまり、この論争当時における公立小学校の教員給与は、学校の設置者である市町村が負担するものとなっていた。もっとも、この論争に先立つ1900年の第3次小学校令ならびに同施行規則によって教員俸給の標準額がいちおう定められてはいたのであるが、実際の支給は必ずしも規定通りに行われていたわけではなく、市町村の裁量によるところが大きかったと言われる（陣内1988, pp. 101-104）。しかも市町村の多くは教育費を出し渋り、教員給与の水準はきわめて低いところに留めおかれていたため、当時における小学校教員の生活難は相当に深刻なものであった。

投書のなかにも、そのことに言及したものはきわめて多い。

「長い間の小学校教員云々の議論も根本はと云へば金の問題さ」（猿仙坊／1912.2.8）

「米価は騰貴し、生活費は数年間に非常に増大した。軍人や官吏は、既に増俸されて、この生活費の高上に<sup>かな</sup>叶ふ様になつたが、最もみじめなのは小学校教員である」（弾正台／1912.2.15）

「小学校教員をして今日あらしめたるは物質的待遇の低きも亦一因たるを失はない」（田の人／1912.2.21）

「彼等の多くは自分の子供を満足に教育出来ぬのみか衣食足らずして汲々、<sup>びないちもん</sup>鏝一文と雖も蓄財の余裕なし」（弾咄／1912.6.19）

教員たちの多くが俸給の多寡に執着し、雇い主や現場監督者であるところの村長や視学に対して平身低頭しなければならないというのは、してみると必然的な流れでもあったということになる。

このあたりの事情を、教員である投稿者のひとりとは次のように説明している。

「郡役所のへぼ官吏にも低頭し、町村の金持及役場の書記に<sup>おしげ</sup>迄惜気もなく頭を下げねば旨く行かない。自ら傲然と構へて居たならば首が飛んで仕舞ふ。故に神聖なる教育授業も終には見すばらしき普通以下の大工、商人と<sup>つひ</sup>選ぶなき様な境遇になつていたのである。…（中略）…憤慨した所で仕方がない。随つて種々な噂に上る詰らない職業のやうに思われるのだ。」（白風生／1912.6.15）

周囲からは卑屈なものとする教員たちの態度は、彼らに対する待遇の粗末さによって生み出されたものだったわけである。

さて、このように権威的教員像と小市民的教員像という2つのイメージがない混ぜになったようななかたちで、くだんの投書欄における教員批判言説は展開されていた。この2つのイメージは、一見したところ全く対極的なものであるようかのように映るが、これらが教員批判の文脈のなかで同居していたということについては、おそらく矛盾はなかった。むしろ、このような対極的なイメージが錯綜するからこそ、教員たちの姿がより否定的な存在として浮上してきたとも言うことができそうである。すなわちそれは、「上の者に対しては卑屈な態度をとる一方で、下の者に対しては偉そうにふるまう」ことへの反発であったり、あるいは「ほんらい威厳あるふるまいを貫くべき人間が、意気地のない態度に終始する」ことへの軽蔑であったりしたわけである。

このような批判の声に対して教員擁護の立場からは、「世の人よ教育者を以て万能なりとなす勿<sup>なか</sup>れ」（三河一訓導／1912.1.26）とか、「世の中すでに濁れり、豈<sup>あに</sup>独り教育者のみ清廉ならんや」（岡森生／1912.3.29）という反論が数多く寄せられている。つまりは、「俗世間に穢れているのは他の職業人でも同じはずなのに、教員ばかりを責めたてるのは理不尽ではないか」というのが反論のひとつのパターンであったわけだが、このタイプの反論はしかし、いわば消極的な反論というべきで、くだんの教員批判に対する対抗言説としてはずいぶんと非力なものであるように映る。同じ教員擁護論であっても、その筆致は秋風一派を痛罵するときの威勢のよさとは全く対照的である。

とはいえここで提示されているロジックは、消極的とはいえ、それなりに筋の通った話であることもまた確かであろう。他の一般的な職業ならば批判の対象とはなりにくいような話題であっても、教員に対しては世間からはことさらに厳しいまなざしで捉えられてしまう。ここには、教員という職業における聖なるものと俗なるものの相克ともいべき事態が見て取れるのではないだろうか。

このこともまた、マクロな観点からするならば、近代教育に固有のアポリアということができそうである。制度化された学校組織のもとに置かれた教員たちは、一方では教師としての聖性を期待されながらも、他方では一介の俸給生活者にすぎないという世俗性を併せ持った存在であった。教員に対するこの2つの要請は、原理的には折り合うことの難しいテーマであったというべきであろう（陣内 1988）。明治末年という時点において、こうした相克がある種の臨界に達したところに、この論争は位置していたように思われるのである。

## 5. 素性をめぐる争い

ところで、この論争に参加したのは一体どんな社会層だったのだろうか。この問いは、本投書欄における「教員批判」がどういう社会的性格のものであったのかを理解するうえで本当は重要な事柄であるのだが、前述のとおり、残念ながら本欄には投稿者のペンネームが記載されるだけで、彼らの本名はおろか職業や年齢すら明らかでない。

しかしこの論争においては、匿名だからこそ起こりえたともいえるべき展開が生じているところが、まことに興味深い。ここで注目したいのは、中傷合戦がエスカレートするうちに、やがて匿名の論敵どうしのあいだでそれぞれの素性の探り合いが起きていることである。

「気に入らない発言をするお前は、一体どこの誰なんだ？」というわけであるが、このあたりの展開もまた、昨今のネット上に見られる現象とよく似ているところが面白い。ただし、今日のネット上でのトラブルの結末が、しばしば当事者の本名やプロフィール、過去の履歴等の特定にまで至ることがありうるのとは違って、この時代の情報環境はあくまでアナログである。相手の素性を探ろうにも、ただ単純に掲載された投書の内容から推し量るしかないわけで、そのため「お前はどことこの誰々だ！」ではなく、「お前はさっさとこんなヤツに違いない！」という決めつけが横行することになるのである。

そんなやりとりの典型といえるのが、プロローグに引用した記事にもあったように、秋風をはじめとする教員批判派側の投稿者が、その論敵たちのことを、まさしく小学校教員であると決めつけるパターンである。

「反対の立場に立ってハガキ集の欄を汚すものは却て教員なるが如し。」(伊予天眼夫／1911.12.3)

「秋風君ひとたび小学校教員を罵倒して以来、ハガキ論壇今に花を咲かせて騒がしい中には実際教育に従事して居る人も少くはないらしい。」(丘の人／1912.2.27)

自分たちが繰り出す教員批判に対して過敏に反応してくるからには、彼らこそまさしくその当事者にほかならないというわけであるが、そういう認識は、この論戦のやり取りを冷ややかに眺めていた第三者的な立場の投稿者のあいだでも、ある程度共有されていたようである。

「本欄は小学教員問題で何時でも賑やかである。其は読者否投書家に小教師が多いからであろう。」(水音生/1912.5.12)

「秋風子は余り偉い人物とは思はぬが、それに騒ぎ立つ教員の浅知恵は笑止千万」  
(白星/1912.5.25)

なるほどこの論争がこれほどまでにヒートアップした一事情として、そこに投稿者の実際の属性が関係していたという仮説は有力であるだろう。山本武利が明治30年代前半における新聞投書欄の分析によって明らかにしたところによると、当該期における『読売新聞』は、学生を中心とした知識人読者の比率が高く、また他紙に比べて教員の読者比率も相対的に高かったことが確認されている(山本 1981, p.105)。実際にこの論争内でも、自分が教員であることを明かしたうでの投稿も少なくなかった。

とはいえ、仮にこの論争に参加した教員比率が相対的に高いものであったとしても、さすがに反論してくる者はみな教員だったというわけではなかったろう。しかしそれにもかかわらず、一方の陣営側は敵対者たちの正体を、もっぱら教員と決めつけ、しばしばそういう想定の上で攻撃をしかけてくる。こうしたレッテル貼りはおそらく、論敵たちをやり込め、自らの正当性を補強するためのひとつの技法として理解すべきものであるだろう。コミュニケーション論的な観点からするなら、投稿者の教員比率が実際にどれほどのものであったかという事実よりも、むしろその点こそが興味深い。

しかしながら、我々にとってより興味深いのは、むしろそれとは逆のパターンによるレッテル貼りのほうである。一方的に「教員にちがいない」と決めつけられていた陣営側の投稿者たちは、逆に秋風をはじめとする教員批判派側の投稿者たちの素性をどのように見ていただろうか。該当箇所を以下に引用しておこう。

「師範入学試験に失敗して後中学を三年位まで進みて退校し、今は市内小学校の代用教員でもやって居るのだから。」(都築生/1911.11.5)

「丘の人君に呈す。君は小学校教員を論ずる資格ありや。君の文より察するに、君は中学校を半途に退学し、故郷に帰り代用教員を勤め、而も其れさへ出来ず今は家にありて安閑と暮らし居る者ならん。」(愛圃/1912.3.27)

「秋風となん呼ぶ男、彼や可憐なる代用教員なり。一定の教育を受けながら代用てふ有難からぬ名目を戴いて、生徒には馬鹿にされ、他の同僚間に交わりては何時も金槌の川流れて頭があがらず、其間自ら不平も起らう、不満にも思ふだらう、無理

はないよ、可愛想に、どうか折角自重して社会主義者にでもならぬやうに。」(溪水  
／1912. 3. 28)

「秋風先生君は偽君子なり鉄面皮なり。故にもし我は代用教員にあらずと強弁する  
かも知れん、君に云はれたら『お生憎様、門違ひだ』と云ふかも知れぬが、しかし  
其の手は喰はないよ。もし君が代用にあらざれば責任を明にする為、自己の本籍氏  
名を明示せよ。僕又、本籍氏名を明に指示して、論戦の相手とならん。」(与太郎/  
1912. 5. 4)

じつに想像力たくましいというか大胆不敵というか、これという根拠もなく赤の他人  
の身の上を、ご丁寧にも詳しい経歴までこしらえて決めつけるやり口は、まったく  
もって見事というほかない。しかしながら、それ自体は根拠のない決めつけであった  
としても、そこにはそう決めつけるに値するだけのリアリティが前提とされていたで  
あろうことを、ここで見落とすわけにはいかないだろう。

というわけで上記の引用からあらためて整理しておく、その論敵たちの見るとこ  
ろ、秋風やその一派は中学校の半途退学者、つまり正系の進学ルートからの落伍者た  
ちであった。そして彼らに対するレッテルとして共通して挙げられていたキーワード  
が、「代用教員」である。

ここに登場する「代用教員」とは、当時の制度において、教員免許状を持たない補  
助教員のことである。小学校の発足以来、正規の資格をもった正教員の数の慢性的な  
不足が続いており、その補充のために用意されたのが代用教員の制度であった。特に  
財政の豊かでない農村部ほど教員不足は深刻で、「高等小学校を優秀な成績で出て、  
中学校や実業学校に進学するのでもなく、また家業に身を入れているわけでもない農  
家の若者などがいれば、すぐに授業生、雇教員、代用教員など、いろいろに呼ばれる  
『正規』ではない教師の口がかかってきた」(天野 1992, p. 14) のだという。

しかし言うまでもなくその待遇は、師範学校卒の「正教員」よりもずっと格下の扱  
いであって、多くの若者にとってそれは仮初めのポストにすぎない。明治末年は、こ  
うした代用教員数が増加した時期に相当しており、1910年度時点で、その数は3万3  
千人、全教員中に占める割合は22%にも及んでいた(日本近代教育史事典 1971, p. 205)。  
要するに教員擁護論側の投稿者たちは一連の教員批判の出所を、立身出世の見通しを  
失って不満をため込んだ内部犯行者のしわざとみたわけである。

我々は以前のところで、秋風をはじめとする教員批判論者の一部に関して、近代教  
育的なアスピレーションの加熱を深く内面化した青年たちではなかったかという推論  
に達したのであったが、なるほどただそれだけであったなら、中傷の刃を外へと向け  
る行動には直ちには結びつかなかったはずである。実際に彼らが代用教員であったか

どうかはともかくとして、一連の教員批判の背後には、加熱されたアスピレーションを持って余した若者たちの抱える疎外感・閉塞感があったとする仮説が、新たに浮かび上がってくることになるだろう。そんな閉塞状況の、さしあたって象徴的な存在といえるのが「代用教員」だったということになるのではないだろうか。

ともあれこの論争は、「お前たちはまさしく教員にちがいない」と言いがかりをつける側と、「そういうお前たちこそ代用教員だろう」とやり返す側とのあいだでの、レットルの貼り合いという一面を伴いながら展開されていたのだった。

ここで面白いのは、このどちらの陣営の側からも、「いや、自分はそうではない」と反論した例がほとんど見当たらないことである。このことについては、わざわざそれを訴えるだけのために再び投書したりはしないということもあるだろうし、くだんのレットル貼りがあんがい凶星だったという可能性ももちろん拭いきれない。

しかし、ここでもまた重要なことは、両陣営のあいだに展開された素性の探り合いが実際に核心を突いたものであったかどうかということではなく、これらのレットルそのもののはらむリアリティのほうである。こうしたやり取りは、教員組織内部の階層性のもつ意味の重要性を物語ってはいないだろうか。一連の教員批判が、じつは教員社会内部からの告発だったとしても決して不自然ではなかったという、職場としての学校環境のそんな息苦しい空気が映し出されているように思えるのである。

## 6. まとめと考察

ここまでの知見をまとめておくことにしよう。明治末年の新聞投書欄上に勃発したこの論争は、はたしてどんな歴史的局面を指し示していたといえるのか。この出来事は一面において、近代教育のひとつの帰結を物語っているというのが、ひとまずの総括である。

明治政府のもとで新たに移植された西洋近代的な学校制度は、人々に対して立身出世のための社会的ルートを開いてみせるとともに、若者のアスピレーションを煽り、その副産物としてアノミーを増殖させることになった。と同時に教員たちは、教師としての聖性と俸給生活者としての世俗性とのはざまで、二律背反的な立ち位置を強いられる存在となっていく。我々はそこに、近代教育のはらむ影の一面を看取することができるはずである。

とはいえ、あまり遠大にすぎるまとめ方は、有益なインプリケーションをかえって損ないかねない。加えて、それがあたかも宿命論的な事態であるかのように受け取られかねないところも、この総括のもつ難点というべきであろう。そこでもう少し抽象度を下げて、教員の社会的地位というテーマに即して2点ほど、今回の知見から示唆される事柄について論じておくことにしたい。

まず第1に指摘しておきたいのは、教員の威信の低下という事実に関して、これは養成の問題よりも、待遇の問題のほうがより大きく作用しているであろうということである。そしてこの論点は、戦前期までの教員イメージとしてのいわゆる「師範タイプ」の問題にも深く関わってくるテーマであるに違いない。

すなわち、今回とりあげた論争のなかで登場していた教員批判言説の多くは、もう少し後の時代になってから一般的なものとなる「師範タイプ」（または「師範型」と呼ばれる教員類型に通じるものであることは明白であるだろう。念のため補足すると、ここでいう「師範タイプ」とは、師範学校出身者特有の人間類型を言い当てたもので、「一般に師範タイプと云えば着実性、真面目、親切などがその長所として評価される反面、内向性、裏表があること、すなわち偽善であり、仮面をかぶった聖人的な性格をもっていること、またそれと関連して卑屈であり、融通のきかぬということなどが世の批判を浴びて来た」（唐澤 1955, p. 55）。ともかくもそれは、教員のもつネガティブな気質を表現した概念であるが、この「師範タイプ」批判の台頭はすでに1900年代から始まっており、1920年頃から一般化して、昭和期に至ってから更なる拡大をたどったのだとされている<sup>(5)</sup>（水原 1977, p. 22）。

そもそもここで師範学校の名を冠した概念規定からして明らかなおお、従来の教員史研究ではこのような教員のパーソナリティの問題を、もっぱら師範学校における養成プロセスの問題として捉える見方が標準的な見解となってきたとすることができるだろう。この領域に先鞭をつけた唐澤富太郎の研究（唐澤 1955）はまさしくその典型というべきで、そこでは「師範タイプ」的特性が、森有礼文相主導の軍隊式師範教育によって形成されたものと解釈されていた。

しかしもう一人の泰斗である石戸谷哲夫がこの唐澤の見解に対して、「事柄の半面しか見ていない」と批判していたことは重要であろう（石戸谷 1967, p. 326）。石戸谷は、軍隊式師範教育を受けたわけでもない欧米の小学校教員にも同じような特徴が観察されるという事実を挙げたうえで、「教員タイプ形成については、強烈な森式師範教育の効果を勿論無視できぬけれども、別の角度からの考察も必要だということになろう」（前掲書, p. 327）と述べている。この研究では「師範タイプ」概念に対して直接的にはこれ以上の言及がなされていないのだが、おそらく石戸谷自身、戦前までの教員に特有のパーソナリティ特性の一端は、彼らの菲薄な待遇に由来するものとみていたことはほぼ間違いなからうと思われる。

今回とりあげた論争の経過をあらためて確かめてみても、例の「貧家の子弟」うんぬんを話題にした秋風の投書が強い印象を与える以外には、師範学校の実態と結び付けて教員のあり方を批判したものは意外なほどに少ないことに気付く。批判する側にしても、釈明する側にしても、多くの場合そこで語られていたのは、彼らが過去に受けた養成訓練のことではなく、現時点におけるその身分的不安定と生活の不如意のほ



うなのである。つとに石戸谷が示唆していたとおり、従来の「師範タイプ」理解には、教員批判の根本を、ただ養成の問題だけに回収させてしまう錯誤がはらまれていたのではないだろうか。

そしてそのことは、現代的な政策課題に対しても、大きな示唆を与えるものであるように思われる。既述のとおり、近年、教員の「威信の低下」認識を背後仮説として教員養成制度改革が進められようとしているわけだが、ここでもやはり、教員のクオリティの問題を、ただちにその養成プロセスの問題として考える発想が貫かれているように映る。もちろんここで、教員の養成プロセスの重要性を否定するつもりはないのだが、しかし気になるのは、教員養成改革が叫ばれている一方で、教育現場そのものに対するサポートのほうは蔑ろにされている感がぬぐいきれないことである。

その最たるものは非正規教員の問題であるだろう。近年、財政難などを背景に、非正規雇用の教員が増加している事実があるわけだが、その多くは、正規採用をめざして教員採用試験での次の機会をうかがう若手教師たちであることは周知の事実であるだろう。不安定な社会経済的地位に置かれた彼らの状況は、前節で触れたかつての「代用教員」の姿に重なって見えてこないだろうか<sup>(6)</sup>。

さて、第2に論じておきたいのは、「教員問題」認識のなかに孕まれている相互行為的なメカニズムについてである。

前述のとおり、『読売新聞』誌上でこの論争が交わされた時期は、教員の社会的地位が大きく低下した時期に相当するというのが、先行研究においてほぼ見解の一致をみているところである。そしてそこに、地位低下を裏付ける客観的な背景があったことは、本稿でもすでに確認してきたとおりである。しかし同時にまた、実際の論争のやり取りからは、そうした事実とは異なる次元の真実が浮かび上がってきたように思われる。

ここで振り返っておきたいのは、この論争において秋風をはじめとする教員批判の急先鋒の投稿者たちが演じた役回りである。すでに見てきたとおり、周囲から見た彼らは、「代用教員」ではないかと疑われる存在であった。ここではたして実際に彼らの正体が代用教員であったのかどうかは、それほど重要ではない。社会的な不満を抱え込んだ若年層の象徴的存在として、さしあたって「代用教員」というカテゴリーが選ばれていたとみるべきであろう。つまりここには、狭い意味での「教員批判」という文脈を超えて、社会全体の閉塞状況を映し出しているように思えてならないのである。

我々はふつう、社会的な批判の背景には、批判を向けられる側のほうに、それに相当する客観的な事実があるものとして考えがちである。しかし、「構築主義アプローチ」を主唱する社会学者たちが強調しているとおり、現実の社会問題は、特定の誰かによるクレーム申し立て活動とそれへのリアクションによって醸成されるという、相

互行為的な一面を有していることは忘れられてはならないだろう (Spector and Kitsuse 1977, 中河 1999, など)。批判をつきつける側の事情もまた、無視できない重要な構成要素にはかならないのである。この時期の教員批判言説においても、いうならば社会的に鬱積した不満のはけ口として教員という標的が選り出されたという一面はなかったかどうか、一考してみる余地はあるのではないだろうか。

さらに付け加えるなら、ひとつの社会問題が立ち上がっていくプロセスにおけるメディアそのものの効果について考えることも、おそらく重要であるだろう。

前節までに見てきたのは、秋風という一投稿者の起こした小さな火種が、やがて人々の抱いていた教員に対する問題意識を喚起し、それを巻き込んでいくプロセスであった。そこで投稿者たちが口にした教員イメージは、なるほど一定の現実を投影したものであったにちがいない。しかし同時にまた、それらが新聞というメディアによって触発され、増幅されていったイメージであることもまた疑いえない事実であろう。新聞紙上で教員批判が盛り上がれば盛り上がるほど、世の人々の間で「うだつが上がらない」などの教員イメージは強化され、そして教員たち自身の自意識は深まっていく。つまりは循環的な構図がそこには作動していたはずで、投書欄でのやり取りから見えてくるのは、たんなる社会意識の投影というばかりではない、そうした社会的イメージの生成のプロセスでもあったように思われるのである。

そしてそのことから、我々は現代的な示唆を引き出すことができるだろう。教員社会に向けられる厳しいまなざしは、教員たち自身のおかれた客観的な状況だけでなく、それを超えたところからも生起しうるのである。軽率な診断をもとに誤った対応を引き出してしまぬためにも、銘記しておくべき事柄であるにちがいない。

## 7. エピローグ—「秋風」余話

それにしても、結局のところ秋風とはいったい何者だったのだろうか。この論争にまつわる挿話として、まったくの蛇足であることは承知のうえで、この投書欄のなかで秋風のたどった足取りを、最後にみておくことにしたい。

何度も言及してきたとおり、この論争の舞台となった投書欄には投稿者のペンネームが示されるだけで、その本名はおろか、職業や年齢も明らかにはされてはいない。しかしそれでも、この論争の過程では秋風の素性に迫る手がかりとなる投書がいくつか登場している。

ひとつめは、中傷合戦のさなか、秋風の素性を知る者によって書かれたという形式をとった次のような投書記事である。

「彼は明治四十年頃中学を卒業した。上京して早稲田の文科へ入らんと熱心に父を

説いたけれど何故か容れられなかつた。止むなく一時の<sup>きまぐ</sup>氣紛れに郷里の小学校に代用教員を奉ずる事になつた。彼が無宗教を叫び、小学教員不信任を鳴らすに至つたのは実に此の時からであつた。彼は神経質的多血質の勝つた、現実の経験に乏しい無邪氣漢である、——此一篇を秋風君に呈す」(奥州にてヨタロー／1912.2.17)

要するにこれは暴露記事なわけであるが、ここに示されている内容の真偽のほどは、もちろん明らかでない。秋風の知己による投稿を偽装した、例のレッテル貼りのバリエーションのひとつという可能性はじゅうぶんにあるのだが、仮にそうだとすると、記されている経歴がやけに具体的であるところが空恐ろしい。それでもいちおう「明治四十年頃中学を卒業」というところから計算してみると、この時点における秋風の年齢は22歳くらいということになりそうである。

ふたつめの手がかりは、秋風自身によるものである。秋風を信奉する投稿者のひとり(春風)からのリクエストに応じて、自分の身の上について語ったのが次の記事である。

「春風兄に、僕の如きつまらぬ者を<sup>たびたび</sup>度々尋ねて下さつて有難たう。此の機に於いて僕の身元を明さう。僕は僧侶出身なれども嫌ふて此の職に就かず、一生を科学の研究に委ねやうと思ふ。そして君は僕の老人なるか青年なるかを疑はれたが、僕は二十五歳の青年である。」(秋風／1912.4.25)

僧侶の家に生まれた25歳の青年ということだが、本人の弁だからといって信用してよいのかというと、それはまた別問題というものだろう。とりわけ「僧侶出身」のくだりは、秋風が当欄に宗教論でデビューしたいきさつと辻褄を合わせるための虚偽報告である可能性はきわめて高いように思われる。

さて、秋風の身元を知るうえで決定的とも言えるのが、この論争もかなり終盤にさしかかった頃に登場した次の投稿記事である。なんと秋風の母親から「世の教育家様」たちに向けた謝罪文が提出されたのである。

「謹で世の教育家様方に一筆申上参らせ候。<sup>さて</sup>扱とや本日校長様より御注意を戴き、初めて<sup>こころづきもをし</sup>心附申候。これ迄秋風と称して種々先生方の罵詈<sup>もてあそ</sup>を弄び候は<sup>せがれ</sup>俸松太郎にて、父は先年、村の小学校新築工事中誤つて棟より落ち、無惨なる死を遂げ候てより、此母一人にて親父の後を継がせんものをと二三人の大工さんに弟子入れ致させ候ひしも、根が無<sup>ぶ</sup>性<sup>しやうもの</sup>者のこととて、何れも追ひ出され、二三年の間はただ浮浪<sup>いづ</sup>致<sup>いたしをり</sup>居候<sup>ところ</sup>処、昨年四月より村役場の使丁欠員となり、やうやくこれに住み込ませ候。師範学校の講習科とやらへも本年受験致し候もこれも見事失敗となり、今や只<sup>ただ</sup>

人の悪口を何より楽しみと致居る者に候へば、何卒これ迄の罪は何れも此の母に御免じ下され度、願上たくねがいあげまひ参らせ候。かしこ。」(岩手トメ／1912.6.11)

この記事によると秋風の本名は松太郎。父親を亡くしてから大工見習いとなるも、複数の親方から見放され、しばらくの期間を無為に過ごした後で、今は役場で住み込みの雑役夫をしているとの由である。また、ここに挙げられている、小学校新築工事中の父親の事故死とか師範学校への受験失敗というエピソードは、なるほど今回の教員批判への流れを連想させるものがあるだろう。

すでに見てきたとおり、秋風は師範学校生が「貧家の子弟」であることを激しく攻撃していたのであるが、この内容から察せられるところ、秋風自身がどうやら貧家の出ということになりそうである。

また、この投書内容からははっきりしないが、秋風のこれまでの「文筆活動」から察するに、秋風が一定程度の教育歴ないし学力をもつらしいことは明らかで、となると「代用教員」ではなかったにしても、「正系学歴ルートからの落伍者」という論敵たちの見立ては、それなりに当たっていたとも言えそうである。

本稿ではこれまでに何度も、昨今におけるネット上でのコミュニケーションを引き合いに出してきたが、「今や只人の悪口を何より楽しみと致居る者に候へば」のくだりに至っては、まさしく今日における一部のネット住民の姿を彷彿させるものがないだろうか。

この母親は、地元の小学校長からの忠告をうけて息子の行状を初めて知ったらしいが、匿名とはいえ、地元では噂のタネにでも上っていたのであろうか。母親に知らせたこの校長自身、くだんの論争には迷惑を感じていたのかもしれない。

もっとも、この投書もまた作り話であるという可能性は皆無ではない。あるいは故意の作り話ではなくとも、我が子こそ秋風だと早合点した別の母親の投書である可能性もないわけではないのだが、その内容や前後の経緯からしても、実母による投稿とみて間違いのないのではないと思われる。ちなみに秋風本人は、この投書が掲載された後も、この「母親」については言及しておらず、つまりは肯定も否定もしていない。

このとおり、教員問題で激しく盛り上がった投書欄は、そのきっかけを作り、その後もこの論争の常に中枢にいた秋風の、母親からの謝罪という思わぬ展開を見せるのであるが、当の投書欄ではそれ以後も、じつに淡々と教員をめぐるやり取りが続いている。そもそも今日におけるウェブ上の掲示板やブログ等でのやり取りとは異なり、書き込みがリアルタイムで進行するなどということはない。ハガキの投函から掲載までのあいだに相当のタイムラグがあったために、投書欄上での事態の推移はじつに遅く、論争のやり取りはしばしば跛行的ですらあったりするのである。

そしてそのことを最も象徴的に示しているのは、秋風の母親が謝罪の投書を寄せた

のとまさに同じ日の同じ欄に、よりによって秋風当人の投書が掲載されていることである。母親の行動を知ってか知らずか（おそらく知らなかったろう）、秋風はそこで相変わらず教員社会に対する挑発を続けているのである。

同じ日の同じ投書欄に、息子の行状を詫げる母親と、教員批判のさらなる気焰を上げる息子とが並んで収まっている図は、何と形容したらよいものか、とにかく壮観である（しかもこの日の掲載はこの2編のみである）。この2編が投函された日時の前関係は知る由もないが、もしかしたらそこには編集サイドの悪意があったのかとも思えてくる。

母親の投稿が直ちには影響を与えなかったとはいっても、それでも秋風にとって、身内からのリークは手痛いボディープローだったにちがいない。母親の投稿から約2ヶ月をへてから、秋風は次のような投書を寄せるに至っている。

「余一度本紙によりて小学教師を罵倒せしに論難攻撃今尚止まず。是<sup>たしか</sup>慥に世人の小学教師に同情を寄せつつあるの証左なり。…（中略）…然り、余は教師諸君を愛するが故に痛罵せるなり。されば読者諸君の攻撃は甘んじて受くべし。只疑ふらくは是等投書家中に教師自身の入り居るに非ずや。果して然らば彼等の度量なるものは甚だ狭小共に談ずるに足らず。朝に晩に接しつつある世人の毀誉褒貶を念頭に置くやうの人間が如何で二十世紀の文明国人を薰陶し得るや。満天下の教師諸君よ、余が罵言の悪意にあらざりしを察せよ。多謝多謝。」（秋風/1912.8.4）

「余は教師諸君を愛するが故に痛罵せるなり」とはぜひぶん言い訳がましく、また「攻撃は甘んじて受くべし」などと謝罪しながらも、それでも未練たらしく教員向けに説教めいた文句を書き連ねるあたりが潔くないといえれば潔くないのだが、ともかくもこれは秋風による事実上の降伏宣言だったとみてよいだろう。

例によってタイムラグがあるためか、この投稿の後もしばらくのあいだ、同投書欄には教員問題をめぐる投稿が続いているのだが、それからひと月ほどもたつと、この降伏宣言が効いたのか、それとも単に飽きられたのか、教員問題をめぐる投書の掲載は徐々に散発的なものとなっていき、いつの間にかひっそりと消えていたのだった。

かくして、当投書欄上でおよそ1年近くにわたって燃焼し続けた教員問題論争の炎は、ようやくにして鎮火するに至ったのであるが、しかしその炎は、おそらく完全には燃え尽きたわけではなかった。教員に向けられた厳しいまなざしの種火は、その後長いあいだ我々の社会のなかでくすぶり続けることになるのである。

〈注〉

(1) 投書記事からの引用に際しては、読みやすさを考慮して常用漢字に改め、原文にはない

句読点を適宜ほどこした。また漢字のルビについては、原文はほぼ総ルビであるところを、引用では最小限の範囲にとどめてある。なお、引用文末尾のカッコ内の表記は、(投稿者名／掲載年月日)である。

- (2) 分析の対象となる時期が異なることもあり、とりたてて「続編」と称することはしないが、本稿の問題関心は河野 (2013) を引き継ぐものであることを付言しておく。
- (3) 山本武利によると、新聞界では明治30年代前半にハガキ投書ブームが起こっており、幅広い階層が投書活動に参加したという点でそれは画期的な事態であったとされる (山本 1981, pp. 359-364)。本稿がとりあげた『読売新聞』の事例は、そんな短いブームが去った後の、それから約10年ほど後の時期に属するものであるが、今回通覧した範囲での感触としては、当投書欄の広く開かれた読者スペースとしての特徴は依然として保持されているように思える。
- (4) ただし2006年度以降は、法改正によって国庫負担比率は従来の2分の1から3分の1に切り下げられている。
- (5) ただし水原は、「師範型」という概念のもとで批判されている内容や社会的な文脈は、時期によって異なるとしている。重要な指摘というべきだろう。
- (6) ほかに教育財政面での動向も挙げるべきかもしれない。戦後の教員給与の安定供給に大きな意味をもったといえる義務教育費国庫負担制度が、2006年度以降、法改正によって大きく縮小した事実については既述したとおりである。

#### 〈文献〉

- 天野郁夫, 1992, 『学歴の社会史』新潮社。
- 石戸谷哲夫, 1967, 『日本教員史研究』講談社。
- 陣内靖彦, 1988, 『日本の教員社会—歴史社会学の視野』東洋館出版社。
- 門脇厚司, 2004, 『東京教員生活史研究』学文社。
- 唐澤富太郎, 1955, 『教師の歴史』創文社。
- 河野誠哉, 2013, 「高度成長期における教員の社会的地位をめぐる一考察—教員養成の『修士レベル化』に寄せて—」山梨学院生涯学習センター編『大学改革と生涯学習』17, pp. 29-44。
- 前田愛, 1993, 「明治立身出世主義の系譜—『西国立志編』から『帰省』まで』『近代読者の成立』岩波書店, pp. 116-146。
- 水原克敏, 1977, 「『師範型』問題発生期の分析と考察—師範教育の小学校教員資質形成における破綻—」『日本の教育史学』20, pp. 20-37。
- 中河伸俊, 1999, 『社会問題の社会学—構築主義アプローチの新展開—』世界思想社。
- 日本近代教育史事典編集委員会編, 1971, 『日本近代教育史事典』平凡社。
- Spector, M. and Kitsuse, J. I., 1977, *Constructing social problems*, Cummings Pub. Co., (=1990, 村上直之ほか訳『社会問題の構築—ラベリング理論をこえて—』マルジュ社)。
- 海原徹, 1973, 『明治教員史の研究』ミネルヴァ書房。
- 山本武利, 1981, 『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局。